

航西日記

卷之三

ヲ 7
3267
3



門 77
號 3267
卷 3



記卷之三

青淵漁夫

靄山樵者

同錄

佐野常民
圖書之記

慶應三丁卯年四月廿七日西洋千八百六十七年五月三十日晴。此

日。各都下子出。遊歩。緑陰清涼の地をト。幽致

の茶肆に入り。並榻。て茶菓を試む

同廿八日西洋五月十一日曇。ボワテブロンに往て銃を

試む

同廿九日西洋六月一日晴。夕四時魯西亞帝佛國へ到着

せり

早稲田大学図書館
昭和33.5.31
蔵書

此日魯帝の巴里へ到着せるを見むとて。土人
近郊の者まで。羣集し。ランドオテル客舎の
前往還までつゝ。四時魯帝迎の馬車其餘
騎馬兵歩卒とも美麗を盡し。瀛車會所へ出
り。佛帝ふも壯麗なる。馬車よて。右會所半途ま
て出迎いれ。同四時半此同車よて帝宮よ入ら
る。暫時ありて。魯帝ふハボールバールといふ
街の蕪て設置し。佛帝の別宮へ移らる。陪從
の士官警衛の騎兵等も相應よ召具して殊小
立派の行装なり

觀競馬

同晦日 西洋六月二日 晴。午後二時ボワデブロンの競馬
を觀る小陪從。此日魯帝。佛帝。宇漏生太子。白耳義
王。其他貴族とも小一覽あり

此競馬。去三月十八日觀しと大方同くして。其
催し盛大なり。西洋諸洲の競馬ハ。奕あき戯ごよ同
く相賭かけして勝負を争ふを常とせ。故よ其場よ
て突富カクモの札の如きを賣りて。輸贏ハツカよよりて得
るを為事を事とせ。催主の如きもの多し。此
日佛帝と魯帝と。十万フランクつゝの賭もの
せし。魯帝の方勝さりし。其十万フラン

クを以て。魯帝より直ニ巴里の貧院ニ寄附せ
しとぞ

五月朔日 西洋六日晴。午時シベリオン博覽會の事
を議せしより来る

同二日 西洋六日晴。魯西亞帝より使者来る。夜九時
國帝の招待よりて劇を看るは陪を

同三日 西洋六日晴。午時プランセスミエラ尋問を
今夕四時半宇漏生王到着せり

魯帝到着の時と同じ。此日魯帝。佛帝の宮へ訪
し。前日土人群聚蜩集せるをいとみて。王

車行過の路筋を市街の人の知らざる様は通
られりとぞ

同四日 西洋六日晴。午時半より。巴里城西南の郊。ボ
ワデブロネギエチポートムロシヤンと

いふ所は。大調練あり。佛帝ハ勿論魯西亞帝宇漏
生王。魯國太子。國太子其他貴族集會せり。我公
使をも兼て招待ありて。我輩も陪從するを得と
り

此調練の兵數。步兵凡二十大隊。但合聯隊土坑兵。樂
手隊。附屬砲兵隊。二十座。樂手附屬騎兵。二十四

エスカドロ。歩騎砲の三兵。合せて九六万人程なりといふ。いつきも壯麗なる装にて。部分を正列し。諸兵装填の上。佛帝魯帝其他諸王子とも騎馬にて。陣頭を一巡し。夫より行軍の式あり。尤大調練にて。轉動なり。とて。只周旋行なせし。のとなり。号令ハ佛國第一等陸軍惣督なり。右行軍終りて。後一隊毎に其指揮官よて引纏ひ。各陣營へ歸る。其号令指揮の整齊。旋回機変の自在。一人一体を動もと。

皇帝危難

夫より佛帝魯帝同車にて歸宮の途中ボワデブ

ロレギエの松林の間より。魯帝を狙撃致砲せし者あり。幸ひよして側の馬に中りて。兩帝とも急な。されども大に騒きて。其者を急地捕得たりとを。其後の始末ハ。ラシエール新聞紙據譯に詳なれハ此に附載を

一千八百六十七年第六月六日。佛都にて調兵の舉畢りて後。那破烈倫帝と。歷山帝と。即ち魯西の帝名。その外諸王太子いぢぢり。衆居る帝家の馬車。ボワデブの松林の間を通行せし折柄。一人の男歷山帝へ對し。手銃を一發せり。

曆山帝巴里在留の間附添ハ一々置ス。我國
 帝の騎兵^{レイモツシユレ}是を見て直さま馬車の
 乗口の傍に進ム。其男子衆見物人の
 最前立居るを見受たり。い。さ。ち。小
 おの馬を盤^{カク}らして。その男子は来りけんと
 セ。其男子ハ已より自り。おのり手は傷付^{ケガレ}
 ても顧み。其志を達せむと。更ふその手銃を
 二發せり。其一弾ハ騎兵の馬の鼻穴に當り。一
 彈ハ自り。其指の一を落せり。弦は折れて。諸衆
 人悉く大聲を發して。叫^{ヤハキ}喊^{ケン}せり。さて其馬の血。

帝家の車中ハ注ミ。帝衣を汚らせり。是を以て
 國帝ハ傷を受。如く見え。能くも。天帝の
 眷^{ケン}佑^ウハ依て國帝及曆山帝。少年の王子も皆傷
 を受。るものなり。至。○拿破烈倫帝の神色
 少も変。る。なく。車中ハ立て衆人ハ向ひ誰も
 傷を受。る。と。か。い。の言を告。り。ハ。人々
 感服せり。曆山帝も同。く自答して。我等同。く
 敵を見。りと。述。れ。さ。り。王子。フ。ラ。デ。ユ。ル
 の衣服血ハ汚れ。さ。り。な。れ。ハ。拿破烈倫帝これ
 に向ひて。血ハ汚。さ。る。ハ。傷を受。れ。さ。る。ヤ

と問われし。否君ははいりやと對へ
らまされ。國帝及歴山帝各王子の礼服もさふ
血は汚れさり。○尔時其場より人々皆
憤怒し。その男子をとらえ是を罪せんとせし
り。余義なく士官の警衛を要するに至りし。
その男子は直一の馬車に入。二士同乗し。
巴里の番士一ペロントこれを警護し。市中取
締役所まで送りさり。恰も五時半なりし。
その男子の發せる弾丸一婦人を傷つけさり
しといひ。又その婦人の頭飾の中りさりし。

となりともいへり。尤其婦人の馬車を來せて
同く役所へ送りさり。其男子は波蘭人にて
ブリガウスキといえるものにて。年齢二十歳。
器械の職人金鉄類を製する。工家モツエル
グアレといえる者。屬し。エを操るもの也。
同車警固の一士官。途中其男はいふ。你的弾
丸歴山帝は傷つくといひ。甚殘
念なる体にて憤怒の色顔面は顯き。又其
生國を糾せし。自若る体にて。且その波
蘭人たるを白状し。まゝ其郷貫。年齢等も隠

さむこれを陳述しり。其者ハウオリニ一の
産よて。二年前即十八才よて其國を去りて。此
地よ來り。器械の職工とハなり。グアンの手よ
附。其後モツレユールゲールの手よ属し。今年
の第五月四日ゲールの方より。暇を取られど
も。兼て波蘭人の為よ。法國政府より与ふる扶
助金。一ヶ月三十五フランクと。其他のものよ
て暮し居り。同車の士官々の職業を廢した
る。所以を問われとも對へさる。其後歴山帝
を狙撃すべきとの志を企てさる。何時頃を

りやと尋さる。帝の巴里に到着せしを
承りしより。思ひ立ちさる。いへり。其最初
ハ火曜日の夜。游劇所よ赴くとて。その企をな
さむとせしども。手は一兵を持さざれば。空
しくブルバールプレテエに往來の角よ立て。
衆人の前よ出て歴山帝を見り。帝も巴
の波蘭人さるを察し。知りさる様子なりと自
らういへりと。且其往來よて衆人の帝の為よ。
万歳を唱ふるをも聞さる。巴ハ一言をも
發せざるの折より。狙撃をへさ志まき決せ

りと○其明水曜日ブルバールセバストボ
ルよめる。武器を驚げる家を行て。二挺うと
のピストルを求めう。其商家よてハフ
ランクブの筒数多を示さう。其用は適を
へきや否やを問ふ。其中の試験を経るも
のあり。九フランクよて賣るべとの事よて。
その最佳なるべきを告られ。是を買得る。
即その價を遣し筒を携へ。己の家歸り。藥を
装せんと試みる。その弾の餘り小さるへ
く心附さう。ハ。他の弾を鑄むとせう。又

心附て其彈を大きくとる。のよて止る
り○其翌朝。即木曜日。渠急ぎ衣服を着し。朝七
時子起出て。其装藥せる手銃を。囊中子納め。午
飯を喫せし。も甚儉素なり。裸麦のパンとソ
ーシーフン。指内は銀紙也。及葡萄酒半瓶を煩
け。その飲りも所を已。袴中子蔵せる小瓶中
子移して携へさう。而して徐に競馬場の方よ
赴ささう。○調兵場は歴山帝の到くる時。是を
幾せんとせし。其道を去らさるより終に
帝車子出合さう。調兵畢るの後。帝車カス力

ードの道を歸るへきよを聞えりさきハ其
 岐をなせる路頭ニ立衆人の前ニ出てこれを
 待受さう恰も騎兵隊一レデメント引來れる
 時なりーハ。帝車是り為ニ暫時路を撰ふが
 ため猶豫ーさり頃て帝車の進むとせー折渠
 帝家鹵簿ニ近つき拿破烈倫帝。歴山帝。兩王子
 の車過る時。ピストールを振りて。是ニ近きた
 りと白状せり○士官又ル輩を能守護せー
 政府の客分さる。歴山帝を何の為ニ狙撃せん
 と企さるやと問ひーハ。渠流を流して。佛蘭西

政府ニ對しをまさるをせー旨を述べり○
 士官再び歴山帝を撃んとせーのとならるを拿
 破烈倫帝をも撃へき企なりやと問ひーハ波
 蘭人の發する彈丸ハ決して他人ハ中らる歴
 山帝ハ直ニ中さる害なり世人をして歴山
 帝の虐政を受けを。自在ならぬめむとの外決
 して他意なし。と述べ久しく黙然として居り
 ○諸裁判方の重役。今午後。問注所ニ赴きさる
 のとならる。ミニストルデタルエル初め。帝命
 を以て悉く集會せり。歴山帝のエートテカン

側役なるマムトスワロフも出席されとも。自高ふりて直に罪人を糾をを嫌ひたり。ロバ。ルエルより其最初の糾ひ。マムトスワロフ氏より始むべき旨をもて。是を促し。さうし。よう。同氏魯語波蘭語佛語等にて種々の問をなす。その親属及以前の職事等を問ひ。十六歳の時波蘭一揆の企は組。砲を肩はふせ。二年前。國を去り。さう。親属とも音信を絶。さうし。を述。さう。○又父と書信の往復をなせやと問ひ。さう。決して其事なく

且他人より己の隠謀露頭せんとの恐をわれ。決して人よ語らふとならう。との事。更に恐るゝ氣色なく。幾回もくりうえ。て是を述。さう。濕傷を受け。さうをもてその左の手を。布。綁。これに水を浸し。なとして。丁寧に介抱。さう。深。い。さう。沈着して頗る才知あるへく見ゆ。その故に陳伏。さう。調印。且。じ。ストーリー。いつさより買得。さう。などの事。ても委し。書面を認め。さう。○手銃。ハ。臺尻の方損。其中。子。彈。丸。一つ入居。さう。第二時。二時。即夜

コンシエルセリーへ連行。番を附置るといふ。○又フランスといえる新聞中ふハ。歴山帝ハ属従せる諸官。悉く憤怒して。速小歸國あるハ。と勸めたり。これ程のとよて。並て期する月日を。一時も低ふをへきなりと答へたりと

是等の新聞ハ。本邦へも速小船舶来りて。諸人疾く見侍りたりむを。今茲ハ其儘くさくくあるせいの。贅言なきども。其時の新聞の速小にて委しきと。且其寛優なる其國風をあらう

めむ為。その儘記せしものなり。又東洋の新聞ハ。米國東方斯哥印度新嘉埠の電線よて不日小達するを得せしむれハ。本邦又ハ支那印度の瑣末なる珍事までも。都て如斯迅速小其詳なるを得る。看る人其氣息の快通をを察せし

此夜十時。魯國公使館の舞躍を見るは陪を

同五日。西洋六月。魯帝の為は町會所にて大舞踏

をなす。凡八千人許集るといふ。此會佛帝魯帝等

招待ありて。曉に徹を

病院

同六日 西 洋 六 時 晴 午後一時。新旅館を視る。同四時
病院を視る。小陪を

此病院ハ市中ハ接し。高敞の地ハ在り。周圍鉄
橋にて屋宇ハ層階造りなり。入口番卒を置
各房病者の部類を分ちて上等下等の差別あ
り。一房毎ニ病者數十人牀を聯て臥せ。臥牀皆
番号あり。卧具都て白布を用ひ。専ら清潔を旨
とす。看護人の皆尼女の務とす。配藥所。食料所。
等十分の結構なり。龍泉を挂て灌頂せしむる
所。或ハ浴せしむる所あり。床下蒸氣管を通し

て。冬月各房を温むる用とす。又一の幽室あり。
六七个の卧牀ニ死尸を載せ。木蓋して面部の
所ハ布もて掩ひ。側ニ勝札あり。是皆病者の病
源の分明ならを。衆面。疑案を存せしものにて。
其標札ハ死者の各年齢より。病の症体を精
く記し。死尸日を経て。必を其病の在る所より
腐敗するをもて。驗探發明の一端となすとい
へり。院の没ろハ洗濯場あり。數人其事小役事
を。院内逡歩の花園あり。病者の運動ハ宜しき
もの地内を徜徉せしむ。此病院ハ巴里市中ハ。

或る富家の寡婦。功德の爲め若干の金を出して、創築せし由にて、其写真の大圖。入口に掲てあり。○凡病を治するに、藥療と投養とによるものよりして、療治はもとより其學術の研究、練磨によるといへとも。其看護、保養の適宜なる資けを得て、順愈追快に及ぶものなるべし。此病院の趣意、療養に在り。且風乾、雨湿、を食物の可否、加減の精察よりして、且風乾、雨湿、を計り、其氣を抑揚、發塞して、其節小適はしめ、身体運動なさしむるをもて、療養相應して、愈快

せる日を究めて、驗を見よといふ。然るに、凡そ其家に在りて、医を請ひ、親族愛護して、故撫し、病者の意を規ひ、好む所よりして、爲す。或は過食し、或は乏飢し、發塞をたり、氣を閉ぢ、精を泄し、漸く心神を勞せしめ、却て病を蓄積し、遂に不治に至らしめ、医を召する類少く、皆まといふの甚しきといふ。故に此地は、病者いふを、病院に就て、療養を請ひ、医療の過ちよて、天殞なく、其天然の齡を遂るを得べしといふ。是人命を重んずるの道と

いふへー

同七日 西洋六月九日晴。日曜日休暇。佛帝魯帝王と俱

よウイルケエルへゆきて遊ぶに陪せり

同八日 西洋六月十日晴。夜九時半、帝宮よて舞躍あり。集

會せる人ハ凡八百人許なり。同二時をりりふ散

せり

同九日 西洋六月十一日晴。夜半國公使館よて舞躍あり

て招待せる小陪を此日ヘルゴレス街の新館

稍修繕せしめて、附屬士官數員引移りぬ。此夜ハ

飯亭へ先立ちて移りし人々の徒然を慰せん為

訪ひつとひて。夜もきりら例の論評雜話と耽り。

短夜の更行くもあらていつり空も明ちりくな

りりれハ。いてやボワデブロン朝景色を見ん

とて、とみふ打出るふ。曙のえんよおろく木

くの葉も露けく往来の人影もさえて。ゆく互

ひよ口をさひなと一つ、川の薈りよいさけ

るよ。水鳥なと群を居て時ならぬ人煙も驚く

けをひもなく。閑なるさまハ。人の害せる心な

きよ馴さる。道の傍にえならぬ花なと咲つゝけ

これとも。手折る人さへもなさハ。興りる政の先

つゆゝゝをとおもふ。夫より龍のりる所ふい
さう。人待為さ設けさる。荷子あり。あまらう。總急
一日の出る頃。各歸りぬ。

同十日 西洋六月十二日 晴。無事。但新聞を得さう。左の如

英國新聞

常月第十一日英國軍艦アルキウス内海へ向
け出帆せり。その船はハーストルホルトサト
ウアストン。九番レシメント甲必丹トウント
衛兵の号令官甲必丹アフリン。并レシメン
ト隊の一部。四十人宛及騎兵馬とも乗組せ。公使の

英國新聞

到着を待んとせ。○大坂チフロマチーキ役の
尋問。英佛米荷の公使とも。十日の内より。大坂
よ向け出帆をへ。其附添人も多數。且大坂よ
て是を饗遇せざる為。大なる用意あるへ。英
國軍艦ハシリスク。よてシルハルリパーク
ス。及妻其兒の一人。ミストルロエツク。医シイ
リスウキンソン。公使館衛足の指揮官フラメ
イ乗組行べ。外畧を

同十一日 西洋六月十三日 雨。午後二時巴里パツシイ郷
ペルイレイズ街五十三番といふへ轉宿せり。取

新聞

締の小遣人を雇はる。一同へ轉徙の祝等あり。同
 時外國局ジユロフロワへ轉任の事を達せらる。
 同十二日 西洋六月 曇。無事
 同十三日 西洋六月 曇。フロリヘラルト来る
 同十四日 西洋六月 雨。教育ミーストルへ教師の
 事を言遣るさる。
 同十五日 西洋六月 曇。朝ジツクドペルシヤキ来
 訪也。
 此日本邦當卯四月十二日出。横濱よりの新聞紙
 を得たり。

博覽會

其畧は佛國アミラルローク其公使は從ひ大
 坂に赴し節受る所の行遇は因りて考ふまは。
 日本人外國人は對して懇親の意を表し且其
 開化の日く進めを見るへ。
 同十六日 西洋六月 晴。夕五時荷蘭留學せる本邦
 の人々到着せり。
 同十七日 西洋六月 晴。無事
 同十八日 西洋六月 晴。午後二時よりフランセス
 ミラ誘引みて博覽會を観るに陪走。荷蘭留學生
 等も從へり。

博覽會場ハセイ子河側一個の廣敞の地にて
周圍凡一里餘もつゝ元調兵場なり。其中
心ハ形チ橢圓イビツリとして。巨大の屋宇を結構し。門
口四方より通し彩旗を立繞らし。内部外部と
分ち。順次小道路を通し。徘徊遊覽ハ便ならし
む。内部ハ乃屋宇の内より。東西諸州此會は列
せる國々其排列せる物品の多寡ハ應し。區域
の廣狹を量り各部分を配當せり。佛蘭西ハ自
國の事故最も規模を盛大とし。天造の靈妙。人
工の精微。産物の豐備。學藝の高尚なる之を世



界萬國ハ比較して愧べらるるの事あらば
以て其得意を示さるべき目途なれハ其
場屋の半を占たり英吉利ハ其六分の一を占
ち。寧滿生。白耳義。南北日耳曼。聯合州。澳斯多利
ハ何れも其十六分の一を占め。魯西亜。米利堅。
伊太里。荷蘭。瑞西ハ三十二分の一は過じ。墨
可。西班牙。都兒格ハ其半より。葡萄牙。希臘。丁
抹。埃及。巴社。亞弗利加。等ハ其半は過じ。我邦
の區域も是等と同等より。之を支那。暹羅。西
國と三個は分ちて配置せり。我物産の多く

出—より遂ふ其半餘を有つゝ至まり。場中
排列せる所のもの。凡物華天寶より。日用の雜
品。學藝に係る諸具とも。自然の化育より。て
成るもの。或ハ窮理の上より神を極め精を彈
—て造り—物。上ハ鴻荒布代の古器珍品を聚
めて殘る所なく。下ハ現世發明の新器を陳て
餘を事なり。各國品物の異を觀は。自ら其國の
風俗其人の智愚も思やらず。殊に東洋西洋。風
氣俗尚の懸隔せる凡器用服色の上より就ても。
畧其一端を概見せ—。都兒格。埃及。亞刺比亞。

の如き亦其風俗を異—て。荒僻陋固の景況
其物品小よりても推知せられたり。瑞典。諾威。
の如き地毯西北の一隅に僻在—て。文物いよ
々開化の盛なるに至らざるも亦察せらる。場
中の物品排列の盛大なる既ハ凡例にも言る
如く普く記—盡く載る能ハざれハ姑く闕如
に附—。所見の大畧を筆せる而已
人工の精—く。學藝の新なる。歐洲競て着鞭の
先を爭ふ。故に此會に出せる物品ハ何れも巧
智を窮め奢靡を盡—。聲價を世界に傳むむと

を。故は蒸氣機關の如き智機の靈工。意匠の慘
淡看破をへき所といへとも。我輩其學は達せ
ざるは。其理を推究せる能はざる。雲烟過眼は看
了するに遺憾といふべし。只其見る所は據れ
ば亞米利加より出せる耕作器械紡織器械ハ
就中其尤たるものと稱をべし。英國ハ之は亞
くの説あり。此部内にて看客を臺に載せ蒸氣
を以て押上げ屋上は登らしめ。屋上は散歩の
路あり。外部の臺榭堂塔庭園諸場を。一目は
眺覽せしむ

油画ハ歐俗最珍重する所にて。其學科も亦盛
に至る。各國より有名の肖像又ハ景色等を出
し。其種類頗る夥しく。縷舉は暇ありといへ
とも。其古代を模寫せし多くハ。宗旨は關係を
する事跡。又ハ殺傷の様体。或ハ絶世の佳人。有名
の山水など。當時譽を擅し。世に大家現今名を
博せる良工の筆跡あり。其優劣固より評し
難く。佛蘭西より出せるセバストポール戦争
の大圖の如き。其人物大に真の人と同じく。其
肖像も當時の將官を真寫せしものにて。趣味

方交互入亂。奮鬪蹂躪をる体。彈丸破裂塵死の體。大軍血戦の景状等遺をなく描画。死尸道に横り炮烟天に漲る其勢氣動容宛然實地に見る心地にて。半は壯快と。半は物凄く見ゆ。此油繪の價貴く。方丈室に掲く處さハ。小額にて。工となるハ千フランク以下らむ。其上等なるハ亦推知をべきなり。

金銀古貨幣ハ羅馬希臘都兒格最多く。形ち異常なるも多く。又古雅にして文房の玩具は供一たさむなり。亦金銀を以て製作する物象

人像或ハ器用は備ふるもの等夥しく排列其用る所果して何の用を為や解をべくらばといへども。昔時其國の昌盛にして物力も殷富なるを知るべく。將其國王の下民を擅制し。一已驕奢の欲を充ることも亦意想をる小足れり。各國現小用る金銀貨幣の見本を聚めし處あり。我邦の大小判一分銀二朱金一朱銀も列し。歐洲其他各國圓貨の中は在て。獨方正を示せり。尺度量衡も各國現に用ゆる所を聚めて列せり。我邦量の如き。又圓形中方正なる

を以て時々目立ちたり。蓋貨幣ハ萬國交通の本
資なれり。各國其制を異なせり。四海一家の
誼において缺典なまば。之を稠人廣衆に其異
同如此なるを示人々を以て之を同規一致に
帰こしむるに至便の念を生おこす。遂に世界中其論
を公なりとして。同意釐正せらるるに至るを為
す。時其議事後も命は尚各國の論并を俟と云
服飾器玩ハ巴里斯曾て精工の名を擅せり。其
處なまば。殊に其極奢窮靡の物品。其仲間によ
り競て出。金銀珠貝。寶石玳瑁。珊瑚を用て製

作せしものにて。希世の珍と稱せべきもの數
る。暇ありて。服飾に至りてハ時様風流日新
を逐ひ。毎に歐洲の魁先を占る。華奢の習俗を
觀に足れり。珊瑚の製作物ハ。伊太里の名産に
して。其種類最多く出せり。又同國より出。天
造物中孔雀石の大さ合把餘にして長さ三尺
五寸許なるもの亦奇觀なるに
學術器械ハ。我輩其術藝に通せざるより。其
發明の可否を認る能へざといへども。醫師道
具及測量器の如き最品類多く見へ。就中人身

解部の真形を模せ—紙細工など精工無比と
 覺ゆ。又越列機^エ寫兒^ルを以て圖画を模出せる器
 械あり。新發明なるよ—電線機の新製なるを
 多く出せ—ハ瑞西を以て第一とせう。絹布織
 物の巧よ—て。且鮮彩なるハ黎昂^{リオン}其名高きハ
 負む。華紋織出—の精麗各色染付の艶絶なる。
 人目を眩—他邦の織物ハ醜婦の美人の側ハ
 在—如—。又造花の工なる殆ど玄化の功用を
 奪ひ薰^{クン}なさをめや—む。凡此場中歐洲人とい
 へども。一週目を展るハ非されハ尋常看了也

る能も。況や其學術窮理上ハ關係する諸物
 品。其理源^{リゲン}ハ遡^{サカサ}至^シ。其所以を考究する學識強記
 のものよりならされハ耐^タさるべ—。我輩語言通
 する能も。識見允^{イン}劣^ロなる。加ふるハ交際公務
 ありて。數日縱觀するを得ざるハより。全く夢
 裡の仙遊。其光景の一斑を縹緲^{ヒョウニョウ}ハ記するのミ。
 展場の外廡ハ周圍各廊を開き。諸州の名産を
 鬻^{ユウ}く茶肆酒店ハ其國風の妝飾セ—二ハの美
 妹を選^{セン}て。五七人宛^{オン}環^{カン}る當て客を迎へ—む。
 亞國^アより出せ—酒店ハ殊^シハ絶色ありとて。遊

客も多く湊り。澳國の酒店ハ。其女の服飾も一
種の製よて古代めきて見ゆ。其外東西各國の
趣を異よせし風をもて。其國産を鬻ぐ中。佛
國人の外邦様は^{ふく}扮^{さく}作^{さく}。未開の風俗を模し。奇
を好む客を引^ま奇^ま贏^まを得と欲するものなり。看
客多く其國より出せる店よて休憩を是意
情の然るのみならは飲食も亦適宜の鹽梅に
ればなり

外部ハ^{タナヘ}徜徉自適なるより。毎日日斜の運動
散歩をまかせ。頗る細密な遊覽をるを得たり。

此部内も稍廣大よりて。一兩日よて看了る
能く。遊園ハ地球上よりらゆる植物動物を
萃り。博物學者の考證を備へ。討論工夫の種と
し。培養樹蓄の理を發明せしむ。宮殿亭榭堂塔
家屋ハ。萬國各風なりて。又質儉奢。自ら國体民
俗の趣向を異よるを示し。特は智識を長ぜ
しむるのなるも。而万里を咫尺の中より約し
て。五族相交るの誼を知らしむるといふべし

遊園の部

第一暖室

此暖室ハ玻璃にて屋宇を設け蒸氣を通
て之を温め熱帶土産の花卉を其暖度
にて養ふ室なり

第二 帝后宮内の模造

第三 オルチエストラの圓形なる宮殿

第四 熱帶國に産する文禽彩羽を聚め
場所

第五 水上に浮生する蘋藻の類を養ふ入造
の池

第六 各國の植木を養ふ室屋

第七 熱帶國の奇花異草を聚め場所

第八 薔薇の類數多栽培へたる場所

第九 第五と畧同

第十 荷蘭古圖画を置たる堂の模形

第十一 ジャマントの寶石細工所

ジャマントハ其質水晶に似て光采の更に
燦然たるものなり。歐洲寶石中最貴重な
て高價なるものなり。多くハ指環。婦女の首
飾なると嵌入すべき程のものなり。大さ寸
に充るものハ。曠代の至宝なり。貴豪は誇

る兆と一魯西亞帝。英國女王等の所持せる
ハ。何れも寸餘よりて。之を圖式にも露一。世
に有名なり。此細工所において寸餘に至る
ハ。更に認めさう。

第十二新紫の馬車類

第十三荷蘭の農舎の真形

第十四鉄軌を關する在來及新發明の器械

第十五白耳義の画堂

第十六レヲボルト第一世半身の石像

○佛蘭西の部の

第十七皇宮

第十八サンマリーの農舎

第十九創傷人を治療せる病院

第二十兵糧を準備せる場所

第二十一寺院梵刹

第二十二鐵造の燈明臺

第二十三寫真場

第二十四クリウソ一人名の發明せし蒸氣器械

第二十五消火器械

第二十六軍務局より出せし兵具類

第廿七萬國演劇

此万國演劇といへるは。未開國の藝人を聚めて。其國風の戲を演せしむ。就中亞弗利加洲中國の遊戲は。金を打鼓を鳴して歌舞をなし。又紐めて腹部を締め。兩人左右より追くまめ上るより。恰も捏切むよりに至り。手を延して幾度となく中返りをなし。又ハシヤボテンの堅く熟し針の如き芒刺のるを馬食して満口血を瀝さ。或ハ燒き鐵の焰の真赤なるを吮め口より涎液を流し

なとする体見ると厭ふべく。人間の為を業とも思ふれど。真に野蠻の風態禽獸と相去る遠うらざるを観ると足きり

第二十八 圓形の層堂

第二十九 歌強り酒樓

第三十 龍泉を仕掛場所

第三十一 風車

第三十二 瑞西の風子設けし酒樓

第三十三 工匠家屋の雛形

第三十四 水車

第三十五 器械にて鳥を撞鐘

第三十六 木匠建築の雛形

○日耳曼 西班牙 瑞西 魯西亞之部

第三十七 農具

第三十八 画具を聚めたる堂

第三十九 澳斯多利彫刻細工物

第四十 字漏生の亭榭

第四十一 澳斯多利の麥酒店

第四十二 同國亭榭

第四十三 西班牙の亭榭

第四十四 葡萄牙の亭榭

第四十五 諾威の殿閣

第四十六 日耳曼の家屋

第四十七 瑞西の画堂

第四十八 魯西亞の厩

第四十九 同國の村舎

○英吉利及東洋に在る属部

第五十 皇子の宮殿

第五十一 蒸氣罐の置場

第五十二 木造の燈明臺

第五十三 軍器

第五十四 越列機よて點火せる燈明臺

第五十五 各國集議所

第五十六 宗門禮拜堂

第五十七 墨是可の古器を聚る堂

第五十八 亜米利加の亭榭

○東方諸部

第五十九 亜弗利加ケユニスの宮殿

第六十 同國モロツコ帝の天幕

第六十一 羅馬の寺院

第六十二 蘇土地峽掘割の越一画圖

第六十三 支那の茶店及演戲

此茶店及演戲とも佛人の目論見よて支那の形容を模擬一。同國婦人調ア亜ハ琴ハ歳ハ十六ハ彩ハ歳ハ外一人名未詳三個を置ス酒を賣らせ其写真をも繋リ一む。演戲ハ其衣冠服色を模して。僅ニ其趣を備フのミ

第六十四 亜弗利加の廐

第六十五 埃及の納涼殿

第六十六 同國の尖塔

第六十七 同國の家屋

第六十八 都兒格の浴室

第六十九 埃及佛閣

第七十 他國より滯留の者宿所

第七十一 伊太里の陶器 并花網石

第七十二 日本の茶店

此茶店ハ全體檜造^{ひのき}にて六疊敷^{むつや}ニ土間^{どま}を添便所^{べんじょ}もつりて。専ら清潔を旨とし。土間^{どま}にてハ茶を煎^{せん}。古味^{ふるみ}咄^{どつ}酒^{しゅ}などを貯^{たくわ}へ。需^{もと}に應^{こた}じ之^{これ}子供^{こども}を庭中^{ていぢゆう}休憩^{きゅうけい}の場所^{ばしょ}ニ沐^{もく}机^きを設^おけ。傍^{かたわら}

ら活人^{いっじん}形^{かたち}を並据^{ならびかた}て觀覽^{くわんらん}ニ備^{そな}へ坐敷^{ざしき}ニハ。か

祢^ね人^{ひと}をみ。同^{どう}上^{じやう}と。全^{ぜん}といえ。妙年^{めうねん}の三女子^{さんじよし}

間雅^{まが}ニ著坐^{ちやくざ}して容觀^{ようくわん}を示^しす。其衣服^{いふく}首飾^{くし}の

異^いるのとなら^なる。東洋^{とうやう}婦人^{ふじん}の西洋^{せいやう}ニ渡海^{たふかい}セ

し。未^{いま}曾有^{そんじやう}のことなれハ。西洋^{せいやう}人の之^{これ}を仔

細^こニ看^みとせるもの。椽^{せん}先^{せん}ニ立塞^{たちさい}り目鏡^{めくわ}もて

熟視^{じくし}を。其座敷^{ざしき}ハ疊床^{ふみど}なれハ之^{これ}ニ上^{のぼ}るを

許^{ゆる}さ^さす。故^{ゆゑ}ニ其体^{そのてい}ニ近^{ちか}つ^つき逼^{せま}るハ得^えざりし

ヲ。間斷^{かんたん}なく蟻^{あみ}附^つ蛸^{しやう}集^ありて。後^{のち}者^{もの}ハ容易^{ようい}ニ見

るを得^えさるも少^{すく}く^くら^らに^にと^とぞ。或^{ある}良家^{りやうか}の少婦^{せうふ}

母子伴ハ来て。其衣服を惜着。竟之を
買むと請。とありと云。其物数寄なる驚く
へ。此茶店の趣。後巻の新聞紙譯。委
々ハ爰。畧。ね

外部位置結構大略右の如く無税。て看る
も。乃。又。木戸錢を取りあり。其木戸錢。一フ
ランクより。半ランク位までなり

博覽場の木戸錢ハ。一ランクなり。多。切
手を買置見物を。一週日。又ハ二週日。通。切手
も。乃。價。少。減。と。い。ふ。外國公使及此會

は列。る。國。の。貴。族。は。附。從。る。官。員。ハ。皆。無
税。なり。開。場。より。日。毎。の。税。の。上。り。高。九。七。万。フ
ン。リ。許。宛。収。と。い。ふ

場外新。鉄軌を設け。氣。車。市。外。は。周。匝。一。近。傍
村里の者往復の便を得。セ。一。め。河。は。數。艘。の
氣。船。往。来。一。て。看。客。の。送。迎。は。備。て。断。る。事。な。一。
場中排列。る。物。品。其。價。の。幾。千。万。は。一。て。且。貨
幣。も。て。も。得。難。き。希。代。の。珍。寶。等。諸。邦。より。運。輸
回。漕。一。て。丘。陵。の。と。く。な。れ。ば。防。火。の。用。心。を。嚴
ま。一。内。部。ハ。火。を。禁。一。地。下。ハ。水。を。繞。ら。一。非。常

の備とす。此場中蒸氣機關噴泉等の為り引注
せる。水の量九十萬戸の都邑。日用に足るべき
程なりといえり

此會の。物品の優劣。工藝の精疎を比較考訂を
するの事ならず。學藝上の諸科も世界の公論と。
日新の知識とを由て。古來よりの疑團を決し。
或は靈妙の新説を諮問する為。佛蘭西有名の
學士藝人の勿論。各國より。來集せる其科の名
家を聚めて。裁判者。鑑定人とし。有象の種類よ
り無象の原理に至り。考證格物。蓋與を盡さば

るなり。其會集。屢りて植物動物及黃銅の鑒
定の會集あり。我邦人も之より列せしものあり。
此討論批評より。博覽會褒賞の甲乙も決定
せらるなり。其裁判人負。佛蘭西に二百五十人
荷蘭に四人。白耳義に二十五人。字漏生
日耳曼奧斯多利に三十人宛。瑞西同盟國に
十二人。西班牙に八人。葡萄牙希臘に四人
宛。丁抹に三人。瑞典諾威に九人。魯西亜に
十三人。伊太里に二十二人。羅馬に二人
都兒格に六人。亞細亞諸部に三人。亞弗利

加諸部ハ二人	亞米利加ハ十六人	英吉利
ハ八十五人なりといふ		
此會ハ同盟セヨ國々ハ	アルゼリー	盧森
堡	白耳義	荷蘭
ハハ	リヤ	澳斯多利
萄呀	希臘	羅馬
太里	孟智世利	都兒格
本	暹羅	亞弗利加
フランシ	哇布	英吉利
西印度	佛領各部	安南
		亞領カナダ等也
		東
		埃及
		支那
		亞米利加
		チユニス
		瑞典
		瑞典
		諾威
		伊
		葡
		西班牙
		瑞西
		日耳曼諸部
		字漏生
		荷蘭
		白耳義
		澳斯多利
		リヤ
		ハハ
		堡
		此會ハ同盟セヨ國々ハ
		ハ八十五人なりといふ
		加諸部ハ二人
		亞米利加ハ十六人
		英吉利

水溜

同十九日	西洋六月十一日	晴。無事
同二十日	西洋六月十二日	晴。無事
同廿一日	西洋六月十三日	曇。朝八時佛人クレイ来る午
後二時風船を又看る		
同廿二日	西洋六月十四日	曇。無事
同廿三日	西洋六月十五日	晴。無事
同廿四日	西洋六月十六日	晴。午後一時フロリヘラルト
郷導して。巴里市街中の飲用水の溜を見るに陪		
を		
此用水溜ハ巴里北郊一里許にありて尤宏大		

なる造作なり。水源へ遠く巨河の委流より堰
来りて。水溜アツみ湊合アツし器械を以て水勢を激し。
各個鉄製の巨オキ管キョウみ注ぎ地中を通し。市中各戸
の飲用。其他數種の噴水園池の用も供に○毎
戸の飲用へ。都て細小なる真銅の管にて。管頭
は捏ね子ぢりりて。之を旋らせば水自ら噴出を別
に汲取運輸の勞なし。噴水石泉の類も亦同し。
蓋水溜の裏みて激貴せし水勢鉄管を通し。更
に幾個の細管を達せ。空氣の漏泄をなすま
に騰上の餘勢尚衰へる管頭に至り捏子の開

くを供て初め噴出の勢あり。水溜の地位へ頗
る高敞し。て。上面へ平地を等しく。石。或は漆
喰聖土にて地中を築造せり。其形巨沼の如く。
但沼中許多の漆喰にて築立たる巨桶なりて。
水其中に入ると直に螺ネ回ルして中心より注下
る。此桶底の中央に孔ありて鐵管を達せなり。
如斯もの幾許といふを知らず。而して各個の鉄
管埋地道を縦横に條達し。更に細小の鉄。又ハ
鉛管を接續して。各所の用水を引く埋地洞に
入る。水。管及尾斯管を見せし。細大。長短。縦横。交

又して。恰も人身の筋骨連環接續する如し。其

結構の壮大工作の精密なる驚感するに足る

同廿五日 西洋六月晴。朝六時汽車にて。コンヒイ

ン。并有名の故城を看るに陪し。夜十時帰館

同廿六日 西洋六月晴。無事

航西日記卷之三

